

6 新潟大学医歯学総合病院精神科における摂食障害患者の入院治療の現状および退院後の経過に関する検討

杉本 篤言・金子 尚史・染矢 俊幸
新潟大学医歯学総合病院精神科

【目的】摂食障害(以後 ED)の治療において、身体管理の必要性から総合病院精神科の果たす役割は大きい。今回我々は、当科における ED の入院治療の現状を調査し、体重増加目的の行動療法を行った患者については退院後の経過についても検討した。

【方法】2003年4月から2007年3月までに当科を退院した患者の中で、DSM-IV-TRにより ED と診断された患者の診療録を、後方視的に検索した。さらに行動療法を行った症例を抽出し、退院時の BMI、週ごとの BMI 増加率、目標体重達成の有無などの「入院中の因子」と、退院後の BMI 推移、再入院の有無、再入院の理由などの「退院後の経過」に対応関係があるかどうかを症例レベルで検討し、さらに統計学的手法も用いて検討した。

【結果】調査期間内に入院した対象者は50名だった。対象は1名を除き全て女性で、平均年齢は24.9歳であった。13名にパーソナリティ障害の合併がみられた。入院目的については、目標体重の達成・維持が35例、食行動異常の改善が10例、身体合併症の治療や他のI軸疾患の治療などが9例であった。

目標体重を設定して行動療法を行った30例のうち、統合失調症を合併した1例、治療中に双極I型障害うつ病エピソードと診断を変更された1例、入院週数が4週に満たなかった1例、1年後の転帰が不明だった7例を除外し、20例について退院後の経過を検討した。入院時、退院時および目標の BMI はそれぞれ平均12.6, 16.0, 16.1だった。統計学的な有意差は認めないものの、緩やかに BMI 増加(0.1~0.2kg/m²/week)した群は退院時の BMI を維持できる傾向にあった。また、5例が退院後1年以内に再入院しており、短期間での再入院を入院中に予測できる因子がないか検討した。入院中に末梢輸液を受けた者は、受けな

かった者に比して1年以内の再入院が多い傾向が示された(Fisherの直接法 p = 0.032)。

【考察】摂食障害患者の入院治療について概観し、行動療法を行った患者の退院後の経過について検討した。緩やかな BMI 増加を示した群は退院後も体重維持できるものが若干多く見受けられ、同施設の鈴木ら(2003)の先行研究で良好な BMI 増加を示した一群と似た経過と考えられた。

7 未診断の骨粗鬆症が一因となり電気けいれん療法中に橈骨骨折を生じた大うつ病の1例

上馬場伸始・北村 秀明・染矢 俊幸
新潟大学医歯学総合病院精神科

筋弛緩薬を用いて施行される修正型電気けいれん療法(modified electroconvulsive therapy; mECT)において、骨折は稀な合併症である。しかし、上腕または下腿にカフを巻き血行を遮断することで末梢におけるけいれんをモニターするカフ法の場合、骨粗鬆症を有する患者では末梢部において骨折の危険性が増す可能性が指摘されている。

我々は、大うつ病の治療としてカフ法を用いた mECT の施行中に橈骨遠位端骨折を受傷し、その後骨粗鬆症の存在が判明した症例を経験したので報告する。

症例は58歳、女性。喫煙歴はなく飲酒もほとんどしない。骨折の既往やステロイドの使用歴はなし。数年前に閉経。当科入院時の BMI は20.6kg/m²と正常範囲内であったが低蛋白血症(TP 6.2g/dl)を認めた。

X-8年から抑うつ気分、不安、自責感などの抑うつ症状が出現し、X-7年11月初旬にA病院精神科に入院した。Amoxapine 75mg/日で症状は軽快し、11月に退院した。しかし再発のためX-3年3月から4月までA病院に入院した。その後も再発を繰り返したので、clomipramine 150mg/日に変更されたり、fluvoxamine 150mg/日が追加されたが効果に乏しく、結局 amoxapine を中心とした治療が続けられていた。X-1年7月に再発したためA病院に入院し、amoxapine 50mg/日に